



はじめての英語症例報告 ～離島医療の現場から

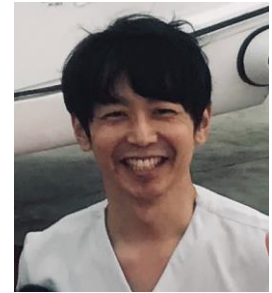
☆推薦文☆

濱田先生、初めての英語論文アクセプトおめでとうございます。Case Report で最も大切なこと、また、Case Report がレアケースの単なる症例サマリーとは異なること、それはその論文に自分の伝えたいメッセージが込められているかどうかです。濱田先生の伝えなかったメッセージが Journal を通して世界中に届き、この論文に命を助けられる患者さんもこれから多く現れることでしょう。英語での症例報告執筆は、最初は敷居が高いですが、一度乗り越えてコツを得てしまえば、あとは同じことの繰り返しです。是非自治医大の後輩達にもこの技を伝授して地域医療の場から Pubmed の世界へとお誘いください。今後ますますのご活躍を期待しております。

腫瘍センター臨床腫瘍部 山口博紀

鹿児島赤十字病院 総合診療科 濱田 嵩史（鹿児島県 36 期卒業）

皆様はじめまして、鹿児島県36期卒業の濱田嵩史と申します。2020年3月まで勤務していた鹿児島県立大島病院で経験した症例がCRST (Clinical Research Support Team in JMU)のご支援のもと“Lactic acidosis and hypoglycemia in gastric DLBCL due to Warburg effect”としてCase Reports in Oncology誌に掲載されることとなりましたので、この場をお借りしてご報告とお礼を述べさせていただきます。



鹿児島県立大島病院は奄美大島という離島にありますが、奄美群島の中核病院として19の診療科と350床の病床とドクターヘリを有する、離島としては比較的規模の大きい病院です。義務年限中の鹿児島県自治医大卒業生は主に総合内科に所属し、消化器科・循環器科・神経内科・腎臓内科以外の内科全般に関する外来・入院診療を行っています。今回症例報告として提出したびまん性大細胞型B細胞リンパ腫 (DLBCL: diffuse large B-cell lymphoma) といった悪性リンパ腫についても本土の血液内科の非常勤Drと連携を取りながら、可能な限り離島での医療を続けています。

本症例の概要ですが、腹膜癌疑いとして当院外科に精査入院した患者が入院当初より乳酸アシドーシスを呈していました。精査の結果、胃DLBCLの診断で化学療法目的に後日当科に紹介となったのですが、その時点で意識状態、呼吸状態ともに悪化しており、アシドーシスもさらに悪化し遷延性の低血糖も起こしていました。このままでは悪性リンパ腫の治療もできず、なによりもまずこの乳酸アシドーシスをなんとかしなければ急変のリスクもあると思い、対症療法をしながら急いで乳酸アシドーシスの原因を調べました。すると“Warburg effect”という悪性腫瘍と関連してアシドーシスが起き、その予後は非常に悪く、そしてその治療には原疾患である悪性腫瘍の治療しかないということを知りました。一見すると全身状態が悪く、化学療法など到底できないのではないかと感じてしまうような状況でしたが、今すぐに化学療法をすれば改善するかもしれないと思い、当院の非常勤の血液内科Drに相談し、当科紹介翌日に治療に踏み切りました。化学療法後は日に日に全身状態が改善すると同時に、アシドーシスも改善し腫瘍も縮小しました。

以前私はCRST代表の松原茂樹先生が執筆された「論文作成ABC：うまいケースレポート作成のコツ」を読み、

その本の中に書かれていた「患者さんが命がけで教えてくれた事象・真理を後世へ残そう」という言葉がずっと心に残っておりました。今回の症例を経験し、「その事象があっても意識されていないために、がんの末期症状の一つとして見過ごされている可能性があるのではないか。そしてこの症例を論文として残すことでこの事象が少しでも多くの人に認知され、今後同じような患者が救われるのではないか。」と考え、ケースレポートとしてまとめられないかと考えるようになりました。

しかしそのように一丁前には考えるものの、和文を含め症例報告を出したことのない私にとって、ここからどうすればいいのかが全くわからず、当然のようにCRSTに相談しようと思いました。ただ、CRSTに相談する前にも、「そもそもこの症例が症例報告に値するのか、この事象が本当にあまり認知されていないのか、私が見ただ単に無知だっただけなのではないのか、相談しても“こんなの論文にならない!”と一蹴されてしまうのではないか、というかもはや返事すら返ってこないのではないか…」とネガティブシンキングのループに入ってしまった、CRSTに相談するのもしばらく時間がかかってしまいました。最終的には「泣こかい、飛ぼかい、泣こよか、ひっ飛べ! (鹿児島言葉で、グズグズ悩んでないでとにかく行動しろ、という意味)」の精神で、恥を忍んでCRSTの門を叩きました。するとそんな私の心配は全くの杞憂に終わりました。相談後すぐ、松原先生と、後に私の論文作成をご指導頂くことになる臨床腫瘍科の山口博紀教授からお返事を頂きました。論文の組み立て方や方向性、細部にまで非常に詳細かつ的確なコメントを頂き、驚きと感謝を感じると同時に、まさに眼から鱗状態でCRSTの凄さを思い知らされました。その後論文作成にとりかかることになるわけですが、前述の通り症例報告を出すのは私にとって初めてのことで(和文含め)、書き方や英語から全くわかっていない中、山口教授には手取り足取り教えて頂きました。私の何百倍も忙しいはずの山口教授からはご相談する度にすぐに色々手直し頂いた上で詳細なコメントを頂き毎回毎回頭が下がる思いでした。そして、最初にCRSTへ相談してから約6ヶ月を経てCase Reports in Oncology誌に提出となりました。すると1週間もしないうちに返事があり、minor revisionもなく1回でacceptを頂くことができました。これもひとえに、CRSTに相談して論文作成できたからだと思います。自分では症例報告につながるかすらも全くわからない中、CRSTという相談できる場所があり、そこで最初に相談し、松原先生、山口教授をはじめCRSTの先生方に背中を押して頂いたおかげです。

私はただ一編の症例報告を出したに過ぎませんが、皆さんもきっと「これは症例報告になるのではないか」と思うような症例があるのではないのでしょうか。もし私のように症例報告を書きたいけどどうすればいいのかわからない、またCRSTに相談しようか迷っている卒業生の先生方がいらっしゃれば、是非思い切ってCRSTに相談してみてください。CRSTの先生方が全力でサポートして下さいます。本稿がそういった先生方の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、症例報告作成にあたりご指導頂きました山口教授には大変お世話になりました。大変ご多忙な先生の貴重なお時間を私の論文指導にあてて頂いたことは本当にありがたく、大変光栄な思いでした。山口教授をはじめCRSTの先生方に、この場をお借りしまして心より感謝申し上げます。

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。
<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介します
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先: 地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>